

## 品質および食味を重視した水稻奨励品種「きぬむすめ」の栽培特性

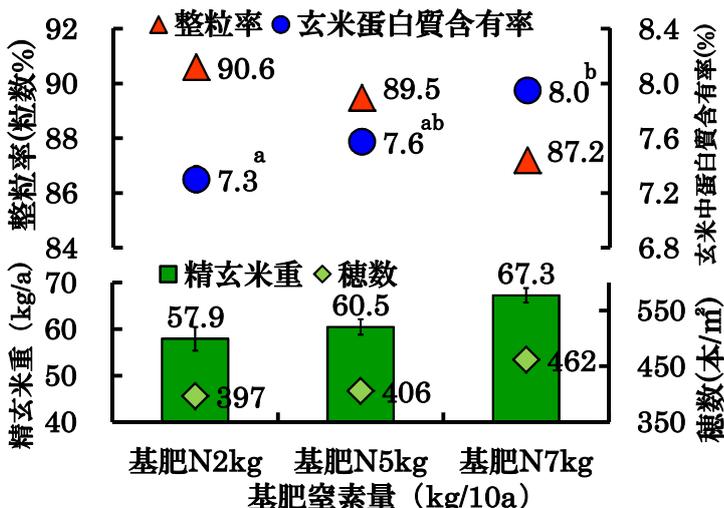
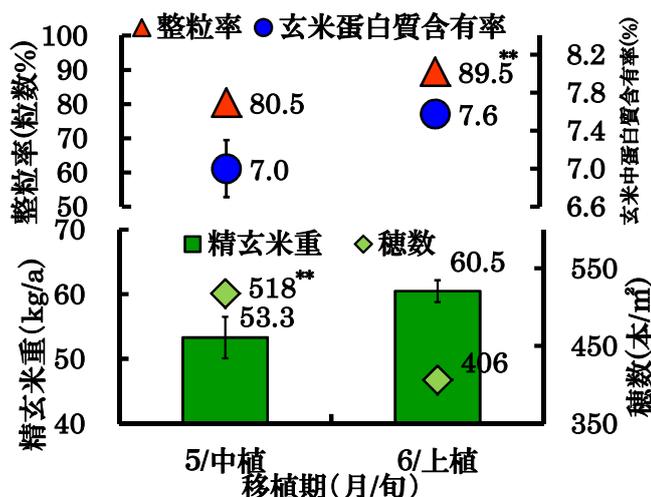
「きぬむすめ」の、品質・食味を安定させるためには、6月上旬頃移植、栽植株数は坪50株程度(15.1株/m<sup>2</sup>)までの疎植が可能で、基肥窒素量は10アール当たり5kgを上限とし、穂肥Iは幼穂長1mm時に施用するのが望ましい。

### 移植時期

6月上旬頃移植は、玄米中蛋白含有率は同等で、整粒率が高く収量も確保されます。

### 基肥窒素量

基肥窒素量は、Nkg/10aで5kgが上限と考えられます。

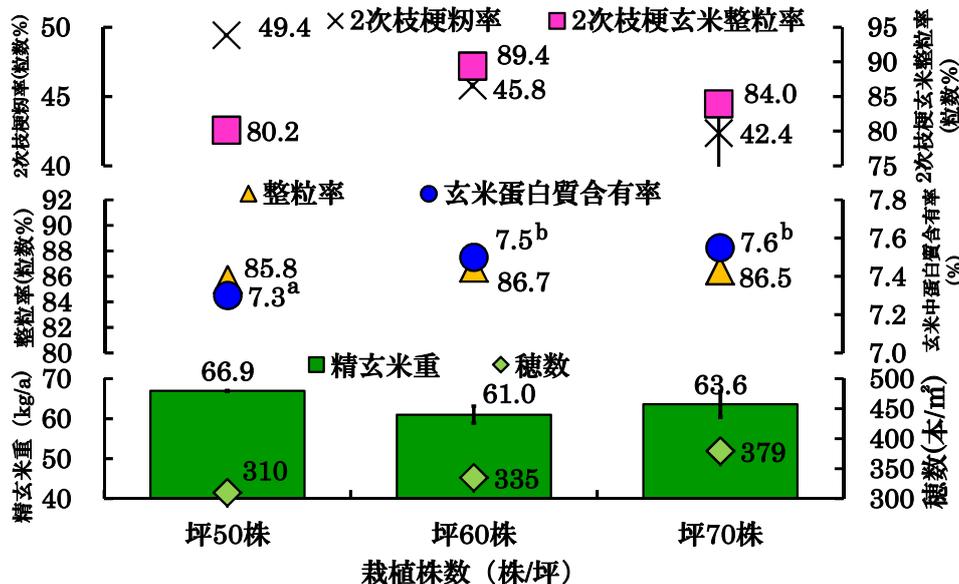


図「きぬむすめ」における作期反応

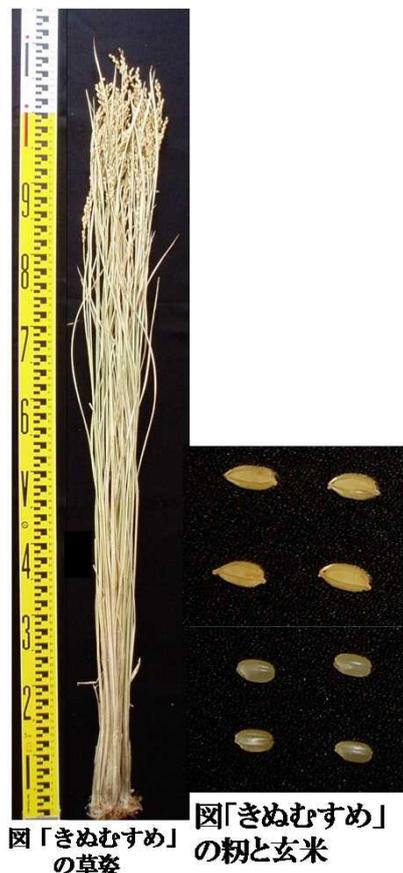
図「きぬむすめ」における基肥窒素量による収量等の相違

### 栽植密度

坪50株(15.1株/m<sup>2</sup>)程度までの疎植が可能。密植に比べて2次枝梗粗率は高い傾向ですが、整粒率は同等で玄米中蛋白含有率は低くなります。

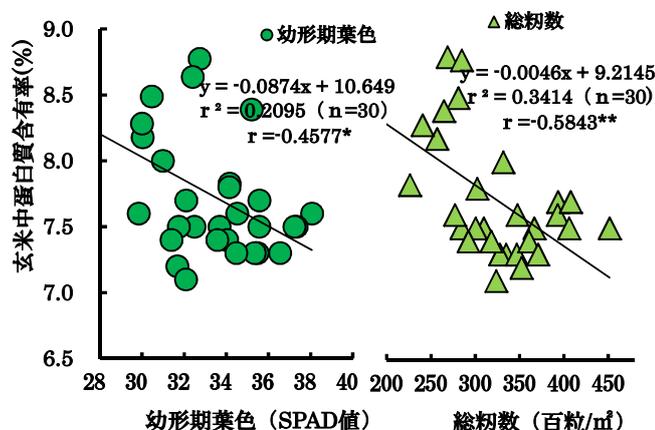


図「きぬむすめ」における栽植株数による収量等の相違

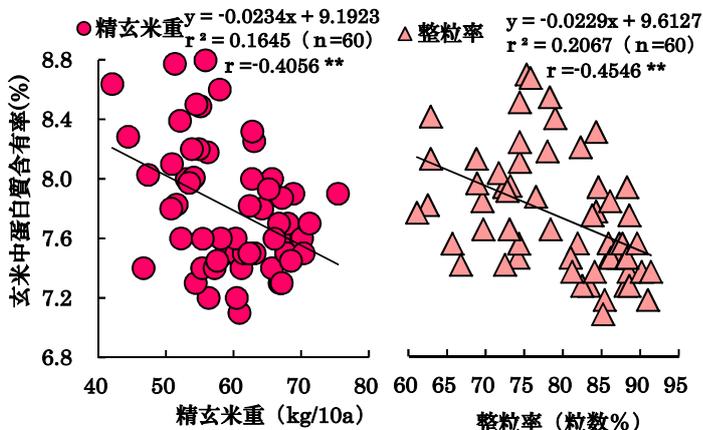


図「きぬむすめ」の籾と玄米

**玄米中蛋白質含有率を下げるためには、幼形期葉色の維持、総粒数の確保すること、収量と整粒率を高めることが重要です。**



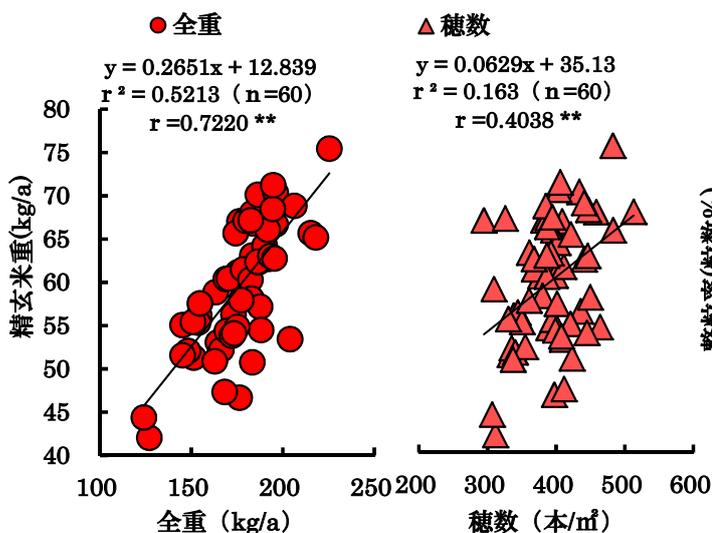
図「きぬむすめ」における幼形期葉色および総粒数と玄米中蛋白含有率との関係



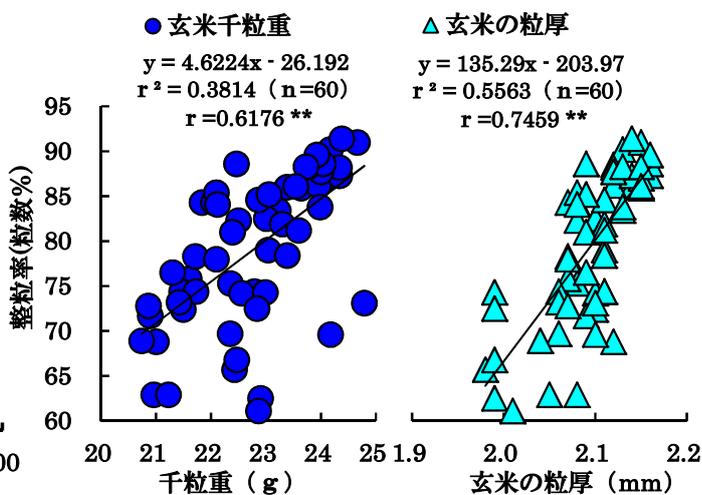
図「きぬむすめ」における収量および整粒率と玄米中蛋白含有率との関係

**収量は、全重と穂数を確保することにより向上する傾向です。**

**整粒率は、千粒重と粒厚が大きいと高くなる傾向です。**



図「きぬむすめ」における全重および穂数と収量との関係



図「きぬむすめ」における千粒重および粒厚と整粒率との関係

◇平坦地（農業試験場）における、移植時期は5月中旬～6月上旬の、栽植密度は15.8～22.7株/m<sup>2</sup>の試験結果です。  
 ◇移植時期が6月上旬以降で、収量確保が困難な場合は、栽植密度を坪70株程度（21.2株/m<sup>2</sup>）に高めることで、日本晴と同等以上の収量を得ることができます（2008年データ省略）。

問い合わせ先：鳥取県農業試験場 作物研究室

電話：0857-53-0721

※ 本書から転載複製する場合には必ず上記に許可を受けて下さい。